

悲しみの果てに

今日 あした

「何ゆえあなた様がそのような咎を受けねばならぬのでしょうか。あなた様が申されたことなのですか」

「いや、私はなにも申してはおらぬ」

左大臣の源高由に向かつてこのような口が利けるのは、皇女であった妻の篤宮しかおるまい。篤宮は、高由の美しい北の方である。切れ長の目は知的に輝き、一見冷たく意地悪そうにも見えるが、その内に秘められた優しさと強さが高由の心を捉えて離さない。

いずれの御時にか、豊かに国を治めておられた帝が急な病で崩御された。皇太子の冷貴親王が天皇に即位されたが病弱で子を成していない。

新しい皇太子には亡き天皇と皇后との間の和平親王、幸平親王、お二人の名が候補にあがった。

関白の藤木鮫鱈は、この機に帝の周りを藤木氏で固めてしまおうと虎視眈々と画策をしている。とはいっても、鮫鱈には娘がいないので帝との姻戚関係を持つに至っていない。摂政の藤木鯛衛門とて同じである。摂政と関白、同じ藤木氏はこのところ、何やらこそそこそと密会を重ねている。

「左大臣の源高由殿は、源姓を賜り皇族を離れたとはいえ、亡き帝の弟宮、その上、娘は皇太子候補である兄の和平親王に嫁いでいるではございませんか、今のうちに何とかしなければ、和平親王が皇太子に、更には天皇に、ともなれば、左大臣は天皇の外戚となり、大きな権力を手に入れて、藤木一族を脅かす存在になってしまう」。

鯛衛門が言うと、鮫鱈は、

「左様。せっかく摂政、関白を藤木で司り、右大臣も藤木鮎之助となって、藤木一族の地固めが着々と進んでいるというのに……でも手は打ってござる」とにんまり笑い、我が意を得たとばかりに得意げに話を継いだ。

「先日、左大臣の所に出向いて、当分の間謹慎をするように申し渡して参りました」

「ほー、何か不都合なこともありましたかな」

「いやいや『源高由に於いては、即位された冷貴天皇を亡き者として、娘婿の

和平親王を天皇にするという陰謀を企てている』という密告があった。事実かどうか検分するまで当分の間、謹慎をするように、と、いやー、作り話でござるよ」

「そうでありましたか、さすがは関白殿、悪知恵に長けておられる。それでは、このことを噂として、巷に流すというのは如何かな」

「悪知恵とは、人聞きが悪うござるよ鯛衛門殿。でもそこは抜かりはございません」

「はあ？ では、もう」

鮫鱈は、分厚い唇を空洞のように開いてクワクワツと、下品に笑った。鯛衛門とて、してやったりとばかりに赤ら顔を満足げにゆすつている。

噂はたちまち都中に広まった。

「邸の周りに人だかりができております」

篤宮の邸では家の者が大騒ぎをしている。高由は生きた心地がしない。

先日、関白から、真偽のほどはわからないという密告の話が聞かされ、そのまま謹慎を言い渡されたが：：。密告の話が早くも巷に知れ渡ったというのである。高由には受け入れられることではない。

「何ゆえ噂は広まったのであろう、見物人は噂をまことのことと思っているのであろうか。篤宮は怖くないのか」

高由は平気な表情をしている篤宮にも驚いている。

「根も葉もないことを信じているものなどいるものですか。ただ面白がっているのですよ。そのような人々の何が怖いものですか。うちには頼りになる家臣もおりますし、左大臣には近衛兵が就いているではございませんか」

「私は怖い、考えを持たない有象無象ほど怖い者はあるまい。どこかに逃げてしまいたい」

「まあ高由様、ほっほっほ、まるで童ではございませんか」

「ほっほっほか、そうであった、篤宮の申す通りじゃ、根も葉もないことが明白となれば謹慎も解かれるであらうし、この者たちも散って行くであらう」。

だが、謹慎を言い渡されて何日もしないうちに今度は、西の京にある左大臣邸に火がかけられ、屋敷は全焼してしまった。

この火事に関して、近衛兵は何もしようとはしなかった。左大臣邸に付け火

をされたのだ、本来なら近衛兵の落ち度であろう。誰よりも早く駆け付け、消化は勿論のこと、原因を究明するべきではないのか。

ここに至って高由は、これまでの一連の出来事は、藤木氏による身勝手な政治の力が働いている、と思った。常々、左大臣の源高由を失脚させようというたくらみがあるのではと不信感を抱いていたのであるが、いよいよそれが現実には……。不安をつのらせながら、傍らにいる篤宮に、

「これは関白の陰謀ではあるまいか。関白はかねてより藤木氏一族で摂政、関白は元より、主要な役職を固めて、思うが儘に政治を操ろうと画策をしている。

左大臣の私の家が焼かれたのも、群衆を煽り立ててそのように仕向けたのか、いや、みずからの差し金やも知れぬ。その証拠に近衛兵が何もしなかったではないか。おそらく出来なかったであろう」と言った。

「まあ、なんと卑劣なことを！」篤宮は、関白の余裕綽々で人を馬鹿にしたような顔を思い浮かべてお腹の底から怒りを絞り出すような低い声で叫んだ。

「それにしても近衛の兵士達は何と情けない。神聖な仕事を放棄してまで、関白の邪悪な意向を守ったのであれば、陰謀に加担したも同じではございませんか」

「篤宮、摂政と関白は偉いであろう。何と言っても帝の次に力があるではないか。いやいや、今では病弱な帝よりも偉い。

関白の藤木鮫鱈は、私に無実の罪を着せて政治の中心から追い出そうとしていた。そのたくらみを実行したのであろう」。

「そうは申しても……、偽りの密告を創り清廉潔白なあなた様を陥れようなどとは……、いえいえ、鮫鱈殿のお考えになりそうなことではございます。

関白、いえ、鮫鱈のお腹を引き裂いて、真っ黒なはらわたを取り出して八つ裂きにしてやりたい」。

篤宮は、冷静沈着で美しいお顔からは想像もできないような胸の内を言ってしまうと、口を真一文字につぐんで高由さまのお顔をひたと見つめた。

高由さまは、思わず笑って可愛らしく怒りを露わにする篤宮を見ながらも小さく震えておられます。

「篤宮よ、そなたは強いもう、私は怖い。私の推察は当たっているであろう。私は綿密に計画された陰謀に陥られたのだ。近衛の良心さえも奪い取ってしまう権力の餌食になってしまった。どうすることも出来ない。この期に及んでは、どこかの寺に身を寄せて出家するのが一番良いと思うのだが……。

そなたには危害が及ぶことはあるまい。そなたは父帝からもらい受けたこの

邸でつつがなく暮らすがい

篤宮の胸には限らない不安と不満が広がりました。

しからばあなた様と仲睦まじく過ごした日々は何だったのでしょうか、もうすぐ生まれて来る私どものややこはどうなってしまうのでしょうか、あなた様のお子達はどうかおつもりか、言いたいことは山ほどございます。

「もつとお強くおなり下さい。」

卑怯者の鮫鱈のたくらみを噂好きの都の人々に触れて回っては如何でしょうか。皆、貴方様のお味方になってくれますわ」

そう、左大臣は役目柄民衆の生活にも心を砕いている。度々庶民の生活の場にも足を運ぶ。美貌の高由が庶民と直接言葉を交わすことはないが、遠巻きで見ている人々の憧れのまなざしを知らぬわけではない。が……。

「民衆の力が何ほどのものか。仮に我に利することを成すことが出来たとしても、権力のある鮫鱈殿や鯛衛門殿の匙加減一つで、生活が成り立たなくなるほどの苦しみを味わうことになる。身分は違えど、近衛の者たちも同じ、そればかりか、殿上人とて鮫鱈殿や鯛衛門殿の顔色を伺わないものなどおるまい。」

そのお二人が……いや、藤木氏の勢力が、私の失脚を願っている時に、私の味方をするものなど決しておらぬであろう」

篤宮の胸に、高由のことばの一言一句が染み渡った。

「左様でございますね」

篤宮は辛うじてそう答えた。そののち、大きく息を吸い込んで背筋を伸ばすと不安を胸に収めた。そして後は自分で出来るだけのことをしようと覚悟を決め、表情を和らげ、せめて笑顔で愛する人を送り出そうと思されたのでございます。

高由は胸にあることを言ってしまうと、改めて出家する覚悟をもって篤宮の顔をじっと見つめた。

そして思い切ったように彼女に背を向け、わずかばかりの供のものを連れて夜陰に紛れて出て行ったのであった。

然るに時を置かずに高由は捕らえられてしまった。

「高由が天皇を亡き者としようと企てた」という関白が考え出した偽りの密告が事実であったと為されたのでございます。何もかもが摂政と関白の思いのままであります。

高由は、都を追放されて大宰府の権ごんの帥そちとして、かの地に流されました。権の帥、というのは二度と政治に関われない役職なのでございます。

高由は出家することを望んだのですが、聞き入れられなかったそうでございます。この大宰府への追放は、捏造された罪への見せかけの償いだったのでございましょう。

お子たちも例外なく、次々に失脚して都から追放されました。藤木氏の成し遂げた摂関政治とはなんとむごいものでありましょう。

新しい左大臣は、藤木鯖生氏が仰せつかったそうです。藤木氏以外の者には住みにくい世の中になることとございましょう。

篤宮の胸に、やりきれない諦めの思いが広がりました。

ただ一つ、この事件の最中に篤宮が産んだ子供だけは、咎を免れたのであります。

篤宮の懐なの中で元気に泣き声をあげるその子は生きています。

高由さまも、お子達も、失脚させられたとはいえ生きてはおりませんか。

授かった命。助けられた命。

私は尼となり、生涯をかけてこれらの命の安寧をお祈りいたそう。

篤宮の胸には一条の光が射したのでございます。

完

(3,916字)